

保井 志之 D.C.

私の最初の留学先はサンフランシスコでした。半年ほど語学学校に通い、そこからアイオワ州のコミュニティーカレッジに入学して、英語と、

講師が話している内容がほとんど聞き取れません。講義を録音して繰り返し聞きました。それでもよく理解できなかった。「この先、大丈夫だ

そこからさらに大変な留学生活が始まりました。最初の1〜2年の基礎医学の履修が最も過酷な期間でした。学期中は毎週のように試験があり、

でみっちり基礎医学教育を受けたことは、知識というよりも、厳しいカリキュラムを乗り越えてきたという意味で、後々の集中力や計画力において役立っているように思います。

パーマー大学の入学に必要な化

(4) 英語のハンディーを抱えながらの留学生活

初めてアメリカの大学生に交じって日本人一人で無機化

ろうか？」という不安な毎日が続きました。唯一の頼りになったのが書き写した講義ノートと教科書でした。辞書

朝から晩まで、いかにして睡眠時間を削って、勉強時間を確保するかを工夫してしま

を引きながら、内容を解読するかのよう

そんな過酷なカリキュラムを乗り越えることができたのもクラスメートのお蔭で、支えてくれた友人には心から感謝

も徐々に上がってきていましたので、少しずつではありましたが、テクニクに関しての議論も友人と交わすことができるようになってい



留学当時の保井D.C.

ディーを抱えながら、パー

わつての留学でしたが、ここ